
守りたかったのは、たった一人の、私の弟。

志崎 遥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

守りたかったのは、たった一人の、私の弟。

【Nコード】

N7217P

【作者名】

志崎 遥

【あらすじ】

ねえ、私が泣いたりしなければ、キミは一人で行ったりしなかったの？
私だって、キミを守りたかったよ。
心に残るのは、後悔の念だけ。

(前書き)

「バイバイ、」と対になっています。

大人という生き物が大嫌いだった。
大人はいつも私たちを打^ぶつから。
でも泣いてしまうのはいつも私だけだった。
だからキミは一人でいつてしまった。
すべてを、捨てて。

キミが時折、思いつめた表情を見せることには気づいていた。

だけど、私は、その理由に気づけはしなかった。
まさか、虫も殺せないようなキミがそんなことを考えていたなんて、誰が思いつくと言うの？

「ここから飛び降りたら、どうなると思う？」

静かに呟いた言葉は、ぞっとするものだった。

走り寄るけど、とても間に合うとは思えない。自分の体力のなさを、これほど呪ったことはない。

振り向きもしないその背中が、どこか遠く見えた。

悲しそうなその身体を、抱きしめてあげたい。いろんなことが溢れかえって今に破裂してしまいそうな心を、慰めてあげられたらどんなにいいか。

「待って！
」

名前を呼んでみても、やっぱりキミは振り向かない。

どころか、キミは俯いて窓の外に乗り出した。

「答えはね、……教えてあげないよ」

風に揺られて、シャツがはためいた。泥で汚れた、元は真っ白だったシャツは、赤いまだら模様ができている。

ついに身体を支えていた手と足が宙へ投げ出される。

自分の口から、悲鳴が漏れた気がする。

キミが、謝ってるように思えた。

私は、たったひとりの弟さえ、守ることができなかった。

私の大嫌いな大人たちは全員いなくなった。

私の大好きな弟を道連れにして。

私の弟に、『殺人』という罪を負わせて。

(後書き)

読んでくださってありがとうございます。いりました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7217p/>

守りたかったのは、たった一人の、私の弟。

2010年12月30日21時37分発行